

## 世界を共に創り奏でる

冬の薄明。朝6時過ぎにはまだ、くきやかに月を抱<sup>いだ</sup>いて、太陽に渡す前の世界を統べている。仄暗い景色を眺めながら窓を開ければ、外気に触れた頬が一瞬だけ緊張し、それが一日の始まりの心地好さに一転する。そして、刻一刻と明るくなる空も輪郭が曖昧になる月もそのままに、わたしはまた日々のなかへ舞い戻っていく。時おり、白じろと乾いて冴えてきた大気や、薄紫とも灰色ともつかない色を帯びた雲が漂うのを、窓越しに察しながら。

あれはいつの冬だったろう。歩いていて、ふと見上げた夕暮れの空。みごとな三日月が、空を切り取るように浮かんでいた。何の気なしに上を向いた、そんな瞬間だったのだが、月のあまりの存在感に胸を衝かれた。その形が美しく際立っていたせいだけではない。いままで何度も見たであろう、その形、その鮮やかさの三日月。そして、月から視線を外せばそれを忘れ、またいつか、ふと見上げては、「ああ」と感嘆する。自らの、その忘れ易さにいたたまれないほどの哀しさを覚えたからでもあった。

強い風が軒の間をすり抜けながら音を立てている午後、バス通りの舗道に厚く渦を巻いている、くさぐさの色があった。寒さも極まり、街路樹のカエデやイチョウがつぎつぎに舞い落としている、赤や黄、黄緑に染まった夥しい枚数の枯葉。舗道のあちらこちらでそれぞれにまとまりを作っては、揺るぎのない楕円の弧を描いて回転し、誇るように色を踊らせているのだった。

当たり前のことだが、それらの葉に、どれひとつとして同じ色も形もない。似たような枯葉同士を見比べても、それぞれに色の濃度がちがう。赤、黄色、薄緑、橙といった色が一枚の葉のなかで混ざり合い、その配分も位置もすべて異なっている。それほどの集まりが、足もとから遠くまで、舗道をさながら舞台にして踊り渡っていく。まとめて「舗道に落ちた枯葉」と言ってしまうことに躊躇を覚えるほどの目ざましさ。自然という限りのない力は、いったい、どれほど豊かにものを創り出してゆけるのだろう。

その舗道には、わたしの視線をしばしば留めさせる場所がある。時間貸し駐車場の一角にある1メートル四方ほどの、ごく小さな花壇である。駐車場の敷地にはもともと、ある

会社の社員寮があった。寮の立ち退きとともに、築年数もかなり経っていたであろう建物が取り壊され、しばらくすると不動産会社の住宅展示場が建ち、それも姿を消して駐車場となった。だが、花壇だけはなぜか、社員寮の門の前にあったものがそのまま残っている。拡張予定があるらしき道路に面しているから、花壇の土地の部分だけは自治体の管理下に置かれているのかもしれない。

この花壇の前でわたしが立ち止まるのはたいてい、新しい花木が植えられていたり、蕾がほころんだのに気づいたときである。未だに、植え替えをしているひとに遭遇したことがないのだが、社員寮があった頃から絶えず、季節ごとに花や木が植えられている。すみれ、チューリップ、バラ、紫陽花、ひまわり、マリーゴールド、葉牡丹、ときどきは小さな実のなる低木も植えられる。さすがに真夏は花も少なく、干上がったような更地の時期になるが、それ以外はいつでも何かしらの花や緑がそこに生きていて、彼らがいのを全うしたなら、さほどの日を置かずにまた、新しいいのちが咲いている。たとえ業務による植え替えであったとしても、その誰かの行いと、与えられた場所で、あるべき姿に生きている植物のいのちの輝きは、こうしてわたしの足を止めさせる。

世阿弥は能役者の在り方を花にたとえたが、そこには観客の鑑賞力もおおきく作用することが含まれるだろう。いくら役者が大輪の花であっても、観る力という、客による肥沃な土壌が用意されなければ、その舞台に花は咲かないからである。となると、空や月、花を眺めて湧いてくる感情を支える力はどうだろうか。片時もその姿を等しくはしていない空、咲いて散るまでの精いっぱいの花の<sup>しわざ</sup>仕業を、確かに留め得るだけの器量がこちらにあるのかどうか。そしてまた、余情を保ち得る心持ちがあるかどうか。ひとを包み込んでい「自然」に対する敬意を問われるかのようなのである。幾度も見た三日月をその度に忘れるわたしなど、不敬極まりないこと甚だしいと責められても言葉がない。

ひとや自然が織り出す、世界を形作るさまざまの「ころ打つもの」は、それ自体で美しさを創っているのではなく、向き合う者も共に創っている。造形として「造る」のではなく、心象風景として刻みこみ、ときにはそこから新たな芽生えをはぐくみ、<sup>えいし</sup>縁を<sup>えいし</sup>飲びながら連綿とつながっていく、それも「創る」ことだからである。そう在るのでなければ、わたし達のまわりには何ひとつ美しいものは存在しないに等しい。だが、ころ打たれたことに感謝し、対象を曇りなく見つめようとするなら、世界はそのいのちを分かち合い、瑞々しい響きを共に奏でさせてくれる。